着心地特集

着心地とは何か

小 池 三 枝

1. さまざまな着心地

着心地のよい衣服とはどのような衣服であろうか。着心地のよしあしを決めるものは衣服なのかそれとも着る人間なのか。

着心地は、衣服を着ている時に衣服によって作られる心の状態である。こう書くと、着心地を左右する要因は専ら衣服の側にありそうだが、この問題はそれほど単純ではない。衣服は、人に着られた状態にあっては、物ではなく、人の心そのものになるからである。

たとえばパジャマは、本来最も快適に作られた衣服のひとつである。一日の仕事を終えて湯上がりパジャマを着る時、多くの人はさわやかで安楽な気分になる。たまには一日中パジャマを着て、家の中でのんびりしたいと思うことさえある。しかし、もし病気になって来る日も来る日もパジャマを着ていなければならなくなったら、その着心地はどのように変わるであろうか。

たとえば病院の中でよく見る風景に、パジャマ姿の入院患者と、白衣の医師や看護婦と、各人各様の見舞客がいる。この場合、パジャマを着ている患者と他の者との間には、病気が健康かの明確な違いがあり、パジャマは病気という状態を端的に示すものとなっている。病人はパジャマを仕方なく着ているが、実は一日も早くそれを脱いで元気な時の衣服を着たいと願っているのではないだろうか。このような見方をすると、パジャマは病人自身にとっても周囲の人から見ても、必ずしも着心地のよい衣服とは言えなくなるのである。一方、看護婦の着ている糊付けした白衣や白帽は、健康上の優者を歴然と示す上に、看護婦の使命感を昂揚させ、その姿勢や動作や言葉遣いをもきびきびとさせるような衣服である。パジャマ姿の患者は白衣の人々の健康をどれほど羨望することであろうか。こう考えると、病

院の中でのパジャマと白衣の着心地は、着る人の心が結び付いているのである。

これとは逆に、物理的機能からみると快適だとは思われない衣服が、心地よく着られている例は数多くある。たとえば腕の良いコックが着るとつもなく高い帽子は、料理の際に便利であるとは到底言い難いが、頭髪を包むただの三角巾とは着る意味が違う。調理場においてコックがその仕事に専念する時、あの白い高帽子は彼の誇りを示す衣服である。あれほど高くない方が頭を意識せずに料理の腕をふるえるであろうに、などと考えるのは素人の余計なお世話というものであろう。また、女性のはくヒールの高い靴は、足を変形させ全身状態にも響くと言われる。しかし、靴屋の店先からいつ迄もハイヒールの靴が姿を消さないのはなぜか。むしろそれはハイヒールの靴をはきたい女性があとを絶たないからである。こう書くと、彼女達ははき心地が悪いが我慢をしてはいているのだと反論する人がいるかも知れない。その場合はきき心地はあくまでも身体とそれを包む物との物理的關係に重きを置く考え方である。しかし着心地という心の問題を考える時には、物理的にははき心地が悪いにもかかわらず、我慢をしてでもはきたい気持、その方が好ましいと思う気持、を無視する訳にはいかない。むしろこの場合は、そのような気持が物理的な着心地を押え優先しているのである。同様に、多くの男性がネクタイとか背広の袖口のボタンなど、物理的機能から見れば不必要な部分をいつまでも取り除こうとせず、また使わないハンカチを胸ポケットに飾るのはなぜか。更に言えば、背広・ワイシャツ・ネクタイの組合せは、日本の気候に最も適した衣服であるかどうかは疑わしく、仕事をする際に身体に楽であるとも思われないが、現代日本の多くの男性に愛用されているのはなぜか。それらは着る人の心の何らかの要求に答えている衣服だからである。

What is "kigokochi" or feeling of wearing?

筆者紹介 Mitsue Koike, Ochanomizu University, お茶の水女子大学 家政学部 被服学科 助教授。

筆者は、日本服飾史、服飾美学を専門とし、「漱石作品における服飾—『坊つちやん』の赤シャツは何か—」（日本文学研究資料叢書、夏目漱石Ⅱ）などの論文がある。趣味は音楽。

本稿では、内田百閒のユニークな着心地を鍵に、着心地の社会的、文化的および心理的内容を語っている。

「だての薄着」という言葉がある。どれ程寒くとも、だてでありたい人が薄着を選ぶ。この場合、少し寒い位の方がだてであることの緊張感を増し、寒さは心地良くさえ感じられるかも知れないのである。暑くも寒くもない衣服がいつも着心地よいとは限らない。

衣服は人間を包み、人間の身体と心に働きかける。しかし、どのような衣服を着るか、また衣服をどのように着るかを決めるのは、人間の心である。着る心が衣服のあり方を決定するのである。(なお、ここでは宇宙服・極地服・消防服・潜水服などのような、極限状態において生命保全を最優先させる特殊な衣服ではなく、日常我々の着る衣服を取上げている。)

以下本稿でのべる着心地は、衣服を着る時に人間が抱くさまざまな心の状態である。この着心地は実に多様であり、その内容や構造を整理して説明することは難しい。しかし、ここではあえて三種の例をあげ、個人のレヴェル、集団(社会)のレヴェル、民族や歴史に結びつく文化のレヴェルでの着心地について考えてみたい。

2. 「悪くない」着心地(個人のレヴェル)

内田百閒の作品に『絹帽』という随筆がある。絹帽すなわちシルクハットは、現代の日本ではほとんどかぶることのなくなった礼装用の帽子であるが、百閒の勤めていた陸軍士官学校では、改まった儀式にはシルクハットをかぶらねばならなかった。大正5-6年頃の話である。

当時、百閒の月給は40円であったが、シルクハットの値段は最も安いものでも20円位はしていて、容易に買うことができなかった。しかし必要に迫られて探しまわったところ、新橋の博品館に7円50銭のシルクハットがひとつ売残っているのに出会う。これを手に入れた百閒に対して、そのあまりの安さに同僚達は不思議がり、手品師のものだろうとか、広告屋のものだろうなどと悪口を言うのである。しかしそのような代物とは違う立派なシルクハットであった。

七円五十銭でも、帽子の肌は濡れた様なつやつやした光沢を放ち、別に天鵝絨の刷毛がついている。その刷毛で帽子の肌を撫でて見ると、深い光沢が筋になつて、撫でた後を伝つて走るのが豪華な気持がした。

百閒の満足した様子が目に浮かぶようである。ただしこの豪華なシルクハットは、百閒の大きな頭には嵌らない。ひとつだけ売残っていたこの安い帽子は、普通のサイズよりもかなり小さいものであった。しかし最初から百閒は、かぶれなくても構わないつもりで買ったのである。

翌年の天皇主催の観桜御会に招待された百閒は、フロ

ックコートとこのシルクハットで出かける。靴は以前はき古した「黒のボックスの深護膜」(礼装用の深靴)を磨きたててはいていく。この靴はもともと少し小さくて靴ずれができるので、はくのを止めていたものであった。

当日この靴は小さい上に硬くて、足首から先を締めつける。その痛さは「どこかで足の動悸が打つ度に、づきんづきんと頭の芯まで響いた」ほどであった。

痛くて、足を踏みたてる事も出来ないで、俵に乗つて出かけたところが、シルクハットを頭に乗つけておくと、響きで落ちるから膝の上においた。入口で会つた同僚達が、また私の事を贅沢だと思つてゐるに違ひない。仲間はだれだつてみんな電車であるのである。

お庭の中を歩いてみると、昔高等学校で、いつも私を叱つた先生が、段段えらくなつて、どこか他の地方の高等学校の校長さんになつてゐるのに遇つた。私の歩き振りが変だつたにしろ、シルクハットをかぶらずに、手に持つてゐる様子は、そんなに悪くないものである。兎に角、さう云ふ場所で、ちやんとした服装で、昔の先生に邂逅して、大いに面目を施した。

頭に嵌らないシルクハットと窮屈で痛い靴は、物理的機能から見れば論外の衣服である。しかしそれを着ける百閒は、自分の様子を「さういふ場所で、ちやんとした服装で」、「そんなに悪くないものである」と考えている。着心地は「悪くない」のである。

この「悪くない」着心地とはどういう状態であろうか。これは、「良い」と「悪い」を一直線上に置いた時に、「悪い」より少し「良い」方にずれた所に位置するといった類ではない。たとえば、非常に良い—良い—普通—悪い—非常に悪い、という一直線上に位置するものではなく、この線から外れた所にある着心地である。この「悪くない」着心地を説明するために、フランス文学者の辰野隆氏の評点に関するエピソードを紹介しよう。

久保伊平治著『入門フランス語講義』という本の中に書かれていたことである。通常、優・良・可・不可(今の大学ではA・B・C・Dに単純化した)に当るフランス語の評点は、très bien, bien, assez bien, pas bien, であるが、辰野隆氏の評点にはこの外に pas mal (悪くない) というのがあった。この pas mal は, assez bien (かなりよい) などよりずっとよく、時には bien よりもよい点だったという。なぜなら、この pas mal は, original なひとつくせあるレポートでなければ貰えなかったから、という話である。

百閒の「悪くない」様子は、この pas mal と同様である。頭の入らないシルクハットは、手に持って悠然と歩

けは立派に礼装の一部としての役目を果たすものであったし、窮屈で歩けない深ゴム靴も、ピカピカに磨かれてフロックコートに釣合う上品で格の高い履物となった。その実体は本人のみが知っているが、周囲の者は誰も気付かず立派な姿だと見ている。百間はひとりその着心地を楽しみながら、「悪くない」と考えているのである。「良い」とは違った、ひとひねりした面白味があり、その面白味を百間のみがひそかに満喫している着心地である。

もうひとつ、『山高帽子』という作品から、百間の独特な着心地を示す例を紹介する。

百間は、シルクハット・フロックコート・深ゴム靴・山高帽子など、格式の高い礼装品をほとんど愛着といってよい感情をもって用いた人である。『山高帽子』にはそれらを愛用するようになった動機が語られている。それは彼が大学卒業後、最初に勤めた陸軍士官学校で主任から次のように申し渡されたことに始まる。

「本校教官の制服はフロック・コートが原則であります。平常はモーニング・コート。或は地味な色であるならば背広服を著られても大目に見ます。しかし帽子、ネクタイ等万事そのお心掛けを以て、不体裁にわたりませぬやう」

これは大正5年のことである。漱石の『坊っちゃん』の中の校長「狸」も「坊っちゃん」から「フロック 張っている」などと言われたように、フロックコートを着て威厳を保っていたが、明治・大正期のフロックコートは地位の高い人の公的服装であった。

窮屈な学校だなと思つたけれど、それから何年かゝるうちに、私にも漸くフロック・コートやモーニング・コートの味が解つて来た。背広だとずぼんのお尻が抜けたら最後、それつきり著られなくなるけれど、フロック・コートやモーニング・コートなら、どんなに大きな穴があいてゐても、中からワイシャツの裾が食み出す程になつてゐても、その不体裁を曝す事なく、なほ厳然たる威容を調へることが出来るのだつた。

同様に、古くなつても平気がかぶれるのは山高帽子であつた。それに、その学校では、講堂まで帽子をかぶつて行く規則なので、埃だらけの教壇の机の上に乗つけて惜し気もなく、又そこに据ゑて眺めた形も、俗な中折型より山高帽子の方が、遥かに雅味があつた。

フロックコートやモーニングコートは、厳肅な場において威儀を正して着る服であり、また権威や格式を重んじる人の着る服である。それだけに、格式ばることの嫌いな人にとっては窮屈な衣服である。百間も最初はその

着用をふだんの登校に強いる学校を窮屈だと思ったのである。しかし、その「味が解つて来た」時に離すことのできない衣服となつてしまった。ズボンの穴からシャツがはみ出すまで着古してもなお、「厳然たる威容」を保つことのできるこの衣服を愛してやまない。山高帽子も同様に、埃だらけの机の上ののせて眺めた形が「雅味」があり俗でないと思う。この作品の中では、山高帽子を昭和の初めの一般には廃れてしまった時期になつても愛用していたことを書いている。ほとんどの人が被らなくなり、周囲から奇妙な目で見られるようになって、百間は山高帽子を被り、反つて周囲の気持を面白がって、奇妙な人間であるふりをしてみせたりするのである。この場合のフロックコートの着心地や山高帽子の被り心地は、単に良いとか悪いとかいう種類のものではなく、また誰もが同感できるものでもない。それは百間の個性によって感じとることのできる独特な境地であり、自分はこれでよしとする強固な確信によって生じたものである。いわば百間は自分だけの衣服を身につけ、自分だけの着心地を味わっていたのである。

3. 制服について（集団のレヴェル）

百間の着心地はあまりに特異であり例外的だと思う方がおられるかも知れない。しかし彼の愛用した衣服自体は、奇抜なものでも珍しいものでもなかった。彼よりももっと奇抜で人目を驚かす衣服を着けた例は、他にいくらでもあげることができる。たとえば江戸時代には、野晒(されこうべ)の文様を衣服に表した人がいたし、現代でも同様の衣服は時々現われるのである。

百間の愛用した山高帽子とフロックコートは、もともと陸軍士官学校教官の制服であつた。制服は、特定集団に所属する人々が着る一定の色や形の衣服である。それは本来色や形が一定であるばかりでなく、着方・着る場・着る心も一定であることを要求している衣服である。いわば着る人間を一定の型に入れてしまう衣服である。百間の場合も、外見的には制服の型に立派に入っていたのである。

衣服は個人を包むものであると同時に社会的性格をもっており、ある個人の着ている衣服は他の人々のそれと似ているか違っているかによって、その人を紛れさせたり目立たせたりする。百間の制服姿は、その意味では士官学校教官としての集団の中に紛れていたと見ることができる。

ここでは、このように衣服を社会的性格から見た場合の、集団の衣服の着心地について考える。

集団で着る衣服の典型は制服であるが、その他、年齢・性別・生活形態・慣習などによって大凡の形が定まっ

ている衣服や、流行の衣服なども、その一種と見なすことができる。いま、衣服の集団性を明確にするために、制服を中心にしてのべる。

制服は、着る人を型に入れ、外見の上で個性性を隠しその代りに記号性を与える衣服である。また往々にして外見ばかりでなく、内面をも記号にふさわしい型にはめることがある。制服は着る人の所属意識を高め、連帯感や団結心を生むことがしばしば指摘されるのはこの作用による。また、学校の制服を着ると学校に行かなければならない気分になるとか、式服を着ると姿勢を正して厳肅な気分になるとか、お祭の揃いののはっぴを着ると心浮かれて騒ぎたくなる類も同様である。型を示す衣服は、着る人の心に型通りになるように働きかけるのである。

このような制服の記号性は、時に着る人がその型にふさわしくない場合にも、型通りの人間に見せかける。警官の制服を強盗が着ていても見る人は彼を警官と信じてしまうのはこの例である。このような制服の悪用は別としても、一般に型としての衣服は、着る人を制約すると同時に包み隠してしまう働きが強い。多くの人間が自分に属する社会の中で皆と同じような服装をしたいと思うのは、集団の衣服のもつ隠れ蓐的な働きによって自分の存在を紛れさせるためである。

制服の集団性と記号性に関連してもうひとつあげることのできる特徴は、均一なもの集合としての一種の美が認められることである。もちろん美は不揃いなものの中にも存在するが、社会という組織の中で集団が整然と揃っている時、多くの人はそれを美しいと感じたり、調和がとれていると感じたりする。この種の美への憧れを制服を着る人はばかりでなく、制服を人に着せようとする統括者も抱くことが多い。

以上のようなことから、制服の着心地は、着る人が所属集団やそれを着る場を好むかどうか、記号としての型にはまることを好むかどうか、あるいは他の人と同じ衣服をつけることを好むかどうかなどによって異なってくるのである。

百間が昭和24年に書いた『制服制帽』という随筆がある。その中で大正時代にある大学で制服を定めた時の前後の様子をのべている。新大学令が施行され、以後は百間の勤めていた私立大学でも官立大学同様に学士を卒業させることになった時、それまでの制服を廃止し新しい制服を定めようという気運が高まった。教官達が色々考えた揚句、それまでの制服は帝国大学の制服（金ボタンの詰襟服と角帽）とよく似た形であったのを止めて、背広に中折帽とし、色は紺か黒などの地味なもの、ネクタイも派手なものを避けることとした。この案は学生も賛成し、新聞も学校の英断をほめ、百間達は得意であっ

たが、実施してみると思わしくなかった。というのは、夏休みに学生が帰省すると、大学が稀な地方では背広に中折帽の姿では大学生と認められず、「あの家の息子は東京の大学に入ったという話だったが、そうではなかったか」と言われるので、以前の角帽を友人から借りる学生も現われたのである。結局この進歩的と思われた新制度は一年足らずでうやむやになり、元の制服に戻ってしまった。そこで百間は言う。

はたで何か云つたり、考えてやつたりしても学生本人の腹の底に末練があつては何もならない。

この場合の最初の制服は、帝大生というエリート集団を示す制服によく似た形であった。これを百間達教官は「帝国大学の真似をして得得と」していると見た為に、私大生は私大生としての見識から新しい形の制服を着た方がよいという発想が生まれた。しかし新しい制服は、学生達に予想通りの満足感を与えなかった。

この時の学生達はなぜ元の制服に戻ったのか。それは百間の言うような帝大生の真似をしたいという末練ばかりではないだろう。当時の大学生は、東京でこそ珍しくないものの、全国的に見れば現代とは違って極めて少数のエリートであった。彼等が帝大生であれ私大生であれ、エリートたることを示すものは以前からの詰襟・角帽だったのである。背広に中折帽は屈辱の上では新しい意識を盛りこめる筈であったが、現実には社会の中で大学生の記号とはなっていなかった。会社員とも官吏とも区別がつかないその衣服を、学生達は直ぐには自分達の型として受け入れることができなかったのであろう。

現在、かつての制服制帽をつける大学生は極めて稀になった。その極めて稀な場合の着心地は、かつての大学生の着心地とは全く違っているであろう。また、一般の大学生らしい衣服の形もすっかり変わってしまった。集団の衣服の型や記号は時代と共に変わり、またたとえ同じ型の衣服であっても、時代と共に記号の意味を変え、着心地を変えるのである。

4. 洋服の受容（文化のレベル）

百間の独特な着心地は、明治以降の日本人が積極的に試みた洋服姿の流れの中にあった。衣服を民族や歴史に関わる文化として眺める時、服飾史に現れた種々の衣服にはどれもその時代の人々の着心地があると言えるが、ここでは近代日本人にとっての洋服の着心地を考える。

洋服と和服、この二種の衣服はそれぞれ全く違った歴史をもって異なる風土の中で育ってきた。日本人が鎖国の後に突然洋服に出会った時、どれ程の好奇心と違和感をもったことであろうか。たとえば慶応3年(1867)刊の『西洋衣食住』(片山淳之助著、実は福沢諭吉の作と

される)という、当時の日本人に西洋衣食住を分り易く図解した本がある。その中の、洋服一揃いを着ける順序やネクタイのつけ方ポケットの使い方などの説明は、和服に慣れた日本人が洋服の何に困惑したかを語っている。この不慣れた新しい衣服を、明治政府は軍服をはじめとする制服や、礼服・公服として採用した。それは新政府が目指した近代国家への整備の一環をなすものであった。特に政治家や役人や軍人の上級職にある人々の着る洋服は、西洋の礼服(燕尾服・フロックコートの類)であった。当時来日した西洋人は、しばしばこの礼服姿を見て滑稽・醜悪・不可解などと評している。

礼服は、その形にただ身体を入れるだけではなく、姿勢も言動も着る場も着る心も、いわば約束事を守らなければならない衣服である。その約束事は、礼服を成立させた社会の歴史や文化が作りあげたものである。当時の日本人にとっては、袴や羽織袴など和服の礼装には慣れていたが、洋服の礼装は突然現れた異質で不可解なものであった。したがって、それを着ける時に困惑し、その姿がきこちないのも致し方なかったのである。

洋服は、導入した時から日本人の衣生活の公的な部分を占めた。このことはその後の服装観に影響を与え、洋服は改まった場での公服、和服はくつろいだ場での私服という偏った観念を育てたのであった。もし洋服が当初から労働着や私服として導入され、民間の衣服として広まっていたら、そして和服が公服として継続されていたら、日本人にとってのそれぞれの衣服の着心地は、今はかなり違っていたことであろう。

洋服の細い袖や身ごろ、首を締めつけるシャツのカラー。その上に結ぶネクタイ、窮屈な靴などは、和服にはなかった緊縛感を与えた。それらの着心地は、西洋化を進める人にとってはまことに快いものだったであろうが、

急激な開化を危ぶむ人にとっては、その緊縛感が日本に対する西洋の圧迫を実感させるものともなった。東大で哲学を講じたケーベルは、フロックコートをつけた日本人について、西洋の曳綱に引かれた日本を象徴するとのべている。このような状態の中で、明治30年代に、礼装のシャツにつける糊の利いた高襟^{ハイカラー}の流行が西洋から入ってくると、西洋かおれを意味するハイカラの語が生まれた。この語はまもなく西洋趣味・新式・軽薄などの意味を伴って流行語となった。洋服の部分名称としてのハイカラは、洋服の外見上の特徴と着心地を端的に示す語であった。この言葉が、西洋風の生活品や生活態度・主義・思想など広い対象について、ある時は肯定的に、ある時は否定的に使われたのであった。

その後大正期に入り、民間の生活様式にも少しずつ西洋化が進みはじめると、ハイカラの語は次第に否定的な意味を失って、洗練された洋風趣味を指す言葉になる。開化期から半世紀経って、洋服を日本人なりに着こなすようになり、その着心地は以前とは変りつつあったのである。百聞の着心地は正にこの時代に感じられたものであった。

我々は衣服にさまざまな心を反映させて各人各様の衣服を着ているが、少し広い範囲で考えれば各自の所属する社会で自分がある所に位置付ける衣服を着ている。更に大きい範囲では歴史と文化の流れの中の現代日本という一齣の中で衣服を着ている。個人・社会・文化、それぞれのレヴェルにおいて多数の具体的な衣服とその着心地があり、それらが複雑に絡み合って各人の着心地をなすのである。その内容と構造の複雑さ故に、着心地を分類したり数量的に捉えたりする事は容易でないのである。

(昭和62年2月25日受理)